



TITLE:

# 一九二〇年代初期日本におけるイ タリア・ファシズム観の考察

AUTHOR(S):

福家, 崇洋

---

CITATION:

福家, 崇洋. 一九二〇年代初期日本におけるイタリア・ファシズム観の  
考察. 文明構造論 : 京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座  
文明構造論分野論集 2007, 3: 1-33

ISSUE DATE:

2007-09-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/89712>

RIGHT:

# 九二〇年代初期日本におけるイタリア・ファシズム観の考察

福家崇洋

## 目次

はじめに

一 ローマ進軍以前のイタリア・ファシズム論

二 ファシズム「反動」論への異議

三 「反動」の多様化と「スピリット」の有無

四 「経綸学盟」結成と上杉愼吉の「ファシスチ団」批判

五 コミンテルン第四回大会紹介と田口運蔵の左派「共同戦線」論

六 「革命」としての「ファスチスチ」と「日本的なもの」への視線

おわりに

## はじめに

本稿は、一九二〇年代初期日本における社会運動家のイタリア・ファシズム観に焦点を当てる。これまで一九三〇年代日本の人民戦線研究においてファシズム認識論の蓄積があるほか、一九二〇年代日本のイタリア・ファシズム観に焦点を当てたものとして、伊藤之雄「日本におけるイタリア」ファシズム観と横田千之助（同『大正デモクラシーと政党政治』所収）、山崎充彦「イタリア・ファシズム、その日本における受容と表現形態——『英雄としてのムッソリーニ像』の生成“IL FASCISMO” nel Giappone」（関静雄編『「大正」再考 希望と不安の時代』所収）がある。

伊藤論文は、横田千之助（立憲政友会代議士）のムッソリーニ評価を東京版『東京朝日新聞』と『東京日日新聞』のムッソリーニ及びイタリア・ファシズム報道から読みとこうとしたものである。それゆえ、社会運動家のイタリア・ファシズム観は主対象とならず、註で新居格、堺利彦、山川均、片山潜ら社会主義者のイタリア・ファシズム論の題が挙げられるも、社会主義者が「ムッソリーニやイタリアのファシズム運動に批判的であつた」<sup>1</sup>との言及にとどまつた。

一方、山崎論文は、高畠素之と上杉愼吉が一九二三年に結成した「経綸学盟」に触れているが、高畠素之のイタリア・ファシズム論に関する箇所は再考を要するうえ、論の中心は映画や宝塚歌劇団などの「大衆文化とイタリア・ファシズム」になっている。<sup>2</sup>これに対して、本稿では、経綸学盟や上杉のイタリア・ファシズム論を当時の社会運動家のイタリア・ファシズム観のなかで捉えなおす。

以上を踏まえたうえで、本稿では、一九二〇年代初頭の雑誌に掲載された社会運動家のイタリア・ファシズム論から、彼らのイタリア・ファシズム観と「革命」（あるいは「反動」）との関係を検証する。政治史研究では、丸山眞男の「ファシズム」論<sup>3</sup>、山口定らの「権威主義的反動」「擬似革命」論<sup>4</sup>、伊藤隆の「革新」派論<sup>5</sup>、雨宮昭一の「四潮流」論<sup>6</sup>など従来「ファシズム」と規定されてきた対象と「反革命（反動）——革命」図式の関係を追って議論が展開されてきたが、いずれも一九二〇年代初期日本のイタリア・ファシズム観の考察を経たうえのものではない。それゆえ、本稿では、一

九二〇年代初期日本に当初「反動」と結び付けて受容されたイタリア・ファシズムが、ローマ進軍を契機にその「革命的相貌が伝えられるなかで、社会運動家の「革命」観とイタリア・ファシズム「反動」論にいかなる影響を与えたかを明らかにしたい。

## 一 ローマ進軍以前のイタリア・ファシズム論

一九一九年三月、ムッソリーニ〔Benito Mussolini〕がミラノで結成した「戦闘者ファッショ」は、一九二一年一月、ローマ大会で「国家ファシスタ党」に改組され、ムッソリーニは総統に就任。一九二二年一〇月、彼は四万人の黒シャツ隊員にローマ進軍を命じ、国王から組閣を命じられた。

一九二〇年代初頭日本のイタリア・ファシズム観に決定的なインパクトを与えたのはこのローマ進軍だったが、それ以前から雑誌『外交時報』の「時報」欄などで「ファシステイ団跋扈」の様を伝える記事が散見される。ただ、本稿が注目するのは山川均の「外国の国粋会」(『改造』一九二二年一月一日号)である。日本での「国粋会」(大日本国粋会)に設立から筆を起す山川は、こうした状況は外国にも存在するとして、「しかし何と云つても西洋の国粋会と云へば、伊太利の『ファスチスチ』であらう」と述べ、イタリア・ファシズムによる「労働者や社会主義者」への暴力を紹介し、「名前は色々である。しかし中味は一つ」という結論によって、これら各国の「国粋会」を一括してとらえた。

またイタリア・ファシズムを、「反動」とみなす論も登場する。山川の小論が掲載された『改造』同年一月一日号のアンケート「一九二二年以後の趨勢」で、「一九二二年以後に於ける社会運動及学术界の趨勢並に傾向に関する御高見」を問われた新居格は、「伊国は反動的なファシスチーが社会運動を圧してゐたが、二十二年後には何かの機会で左転運動が復活しやしまいか」として、「ソヴィエチズム」や「無政府主義」などの興隆の期待を背に、「ファシスチー」を「反動的」だと規定した。<sup>14</sup>

ただ、新居はこのアンケートの回答として、「理性の真理」の時代から「感覚の真理」を強調するやうになるのではあるまいか。オカラガン氏の所謂 *Dual evolution* と云ふたやうな工合に」<sup>55</sup>と興味深い指摘をするが、この「感覚の真理」に基づく新居の姿勢が彼のファシズム論に影響を与えていくことは後述する。

新居も寄稿家を含んだ特集「新興及び反動社会運動批判」が『改造』で組まれたのは一九二二年五月一日号であるが、この時期を代表する雑誌のひとつ『改造』でこうした特集が組まれたことは、「反動社会運動」がもはや無視し得ない存在に映じはじめたことをあらわしている。執筆者と論題は、室伏高信「オルガニザチオン・エシエリツヒ」、新居格「クー・クラツクス・クラン」、小牧近江「クラルテ運動の将来」、瀧山四郎「ファシスチー」、饒平名智太郎「サチアグラハ運動」、柳瀬清「支那の「非宗教運動」」、杉森孝次郎「英国の社会の左右系」、堺利彦「非公式勸説力」となる。

「ファシスチー」を寄せた瀧山四郎の素性は不明だが、論稿の内容は従来論とは一線を画している。同稿では、まずフューメ騒擾の記述から始まり、イタリア社会党、ファシスト、労働総同盟による平和協定（一九二一年八月）について叙述されるが、第三節「ファシスチーとは如何なるものか」で、瀧山は「ファシスチー」を「反動運動」、「伊国の国粋会とも云ふべきもの」と規定しながらも、特に社会主義運動との関係から、「かの革命的擾乱に反動する秩序維持と愛国主義とを抱合して生れたもの」、「社会主義の暴力政治に対する反動」とも述べ、「反動」とみなしながらも社会主義運動、イタリア・ファシズム運動を相対的に捉える視線を添えた。<sup>56</sup>

またこの後、瀧山は「所謂中産階級の各方面を悉く網羅してゐる」と述べ「ファシスチー」と「中産階級」の関係に言及したこと、「元は激烈なる社会主義者であ」ったムッソリーニがイタリアの第一次世界大戦参戦によって論調を激変させたこと、それゆえに「この事は我が国粋会などの成り立ちとは大に赴きを異にする」として、「大日本国粋会」との違いを見出したことも旧来の論とは異なっている。<sup>57</sup>

そのうえで、瀧山は、同節の最後で、上記規定とはまた別の角度から、「ファシスチー」を「理知的産物ではなくして感情の産んだもの」であり、その感情は「愛国主義的情熱と深刻なる社会主義憎惡の反感」であるために、「思想的

根拠は理論的には見出されない。云はじ左傾運動に対する反動であつて一時の変態的異象」と結論した。このように、瀧山は「ファスシスチー」の思想を掴み取るうとしてゐるが、「ファスシスチー」を「一時の変態的異象」とする彼の認識も含めて、いまだイタリア・ファシズムの受容が過渡期であることをうかがわせる。

このあと、「ファスシスチー」の「狂暴」や「一切の左傾的急進運動」への「嫌厭」について事例を挙げながら説明する瀧山は、「思ふに動反動の物理的法則は人間進化の徑路にも免がるべからざるものであり、動のそれが強い程反動も亦強く、その逆に云つて、反動の氣勢の昂まることは又動の勢力を促進せしむる機縁を示す」として「反動」の強烈さに「動」への希望を見出しつつ、最後に「それにしても伊国に於いて相当の勢力を有し、時としては民衆は勿論政府をも手古摺しつゝ存在を続けてゐるのは何の訳であらう」と興味深い問題を提起した。この言葉は「ファスシスチー」を「暴力」にのみ結びつける論理の限界を自ら打ち明けたものだが、ローマ進軍及びムッソリーニ組閣が命ぜられるのはこれから半年後のことである。

## 二 ファシズム「反動」論への異議

ローマ進軍（一九三二年一〇月）は、日本のイタリア・ファシズム論にいかなる影響を与えたか。これ以降、『日本及日本人』や『国本』など右傾雑誌でもイタリア・ファシズム論が登場している。その先駆的なものとして、河瀬蘇北「欧羅巴の国粹運動」、重徳泗水「勝てるファシスチー——伊太利の新愛国党——」（いずれも『日本及日本人』同年一月一五日号）、太田耕造「南欧に蹶つムッソリーニ」、満川龜太郎「欧亜の形勢を顧望して」（『国本』一九三二年二月一日号）などがあるが、本節では太田、満川論文を取り上げる。

昨今の日本のイタリア・ファシズム論が「謬見にあらざれば偏見、意に充たざるもの尠からず」というなかで「我同志」に声援を、というのが太田の執筆動機であつた。彼のイタリア・ファシズム観は「理論より実行、空想より現実

を教ふるもの」<sup>22</sup>と旧来の踏襲に過ぎないが、イタリア・ファシズムと労働者の関係に関して新たな事実が紹介されている。太田は、「ファスシエスチ」が「今や逆に反対党の武器を収めて純真なる労働者を迎へて陣容の充実を計るに至った」として、最も注目すべき現象として、「八月二十一日、伊太利鉄道従業員より成るシンデゲートは労働及社会主義との提携を擲ち国民党へ加担した事」を紹介した。<sup>23</sup>

つまり、「純真なる労働者」を迎え、一部の労働者から支持を集める「ファスシエスチ」が「社会党及び共産党」と対立的であつても、「労働者」と必ずしも対立的でないことがここに取り上げられた。<sup>24</sup>ただ、この問題の重要性を認識していない太田は、次節の「好漢ムツソリニ」で、ローマ進軍に至るまでの彼の言説を追いかけてながら、ムツソリニ及び「ファスシエスチ」の党員における「祖国の現状を顧みて憤然蹶起せる純真無垢の精神」掲揚によるムツソリニ英雄譚の叙述に終始した。<sup>25</sup>

ここで論及されたイタリア・ファシズムと労働者の関係は、満川龜太郎「欧亜の形勢を顧望して」でも深められていないが、同稿ではある重要な問題が提起されている。この論の特色は、ムツソリニとトルコの革命家ケマル・パシャ〔Mustafa Kemal Atatürk〕を「民族主義の両雄」<sup>26</sup>として描き出したことにあるが、こうしたアプローチも太田論文と同様、ローマ進軍が背景にあることは次の一文「曾て大国の宣伝に欺かれて土耳其国民を誹謗した者も、将た又ファスシスチを反動派として、恰かも我国の博徒の集団の如く誤解した者も、今や斉しく両雄の行動及び伊土両国を中心とする国際政局を無視する能はざるに至つた」<sup>27</sup>から首肯される。

同稿は主にケマルの描写が多くを占めるが、第二節はイタリア・ファシズムに言及されている。この節が重要なのは節題「ファスシスチは果して反動派か」から明らかなように、ファシズムと「反動」の等式に疑問が呈されたことである。まず満川は、イタリアでのファシズム政権奪取が意外と受取られたことを「ファスシスチを目するに国粋派となし、或は反動派として、其の直接行動に属する乱暴なる方面の電報のみが伝へられた結果」だとして、「我国では始末に終へぬゴロツキ団体位にしか解せられて居らなかつた」と述べる。<sup>28</sup>これに対して、彼はレーニンがかつて「過激派」

と呼ばれていたことなどを挙げて、「フアスシスチー」も今日同じ境遇にあるとする。

満川はそうしたレッテルではなく、「其の団体の中心人物の人格並に団体の核心を成す主義政綱の如何」に着目すべきだとするが、前者からその叙述を始める彼は、ムッソリーニにおいて「過去に於て俗眼を奪ふ勲位や名譽を有せぬところ、将来大に為す所あらんとする青年の特色であり、特権で無ければならぬ」として「一青年」であつたことを高く評価し、また「フアスシスチー」も「壮志を抱く青年に依つて指導せらるゝこそ、伊太利改造の大業に当り得る資格を有する」として、「青年」を担い手とすることを評価した。<sup>29</sup>

このあと満川がまとめあげたのがイタリア・ファシズムの政治的主張である。「暴力」によつてイタリア・ファシズムを捉えてきた旧来の論に比して、彼は、いまだ「全面目」を伺うことはできないとしながらも、「(一) イタリア・イレデンタを目標とする国民主義を奉じ (二) フユメの占領並にアドリア海東岸の獲得 (三) 地中海帝国主義の実現を期し (四) 農民及商工中産階級の擁護並に労資協力 (五) 社会主義、共産主義、無政府主義に反対し (六) 同時に羅馬教に反対して鞏固且つ統一ある共和的国家の建設を完成せんとするもの」<sup>30</sup>とその主張をまとめた。満川がイタリア・ファシズムの「帝国主義」的側面、(四)「労資協力」、(六)「鞏固且つ統一ある共和的国家の建設」を指摘したのはこれまでの論と比して注目されるが、この論稿のもっとも特徴的な点は、これらを押さえたうえで、満川がイタリア・ファシズムと「反動」の等式に対し、次のような異議を申し立てたことにある。

フアスシスチーとはその語源昔羅馬帝国の大法官の行列の先登に立ち、棍棒と斧とを持つて行くフアスシスより発し、国家の正義を行はんがために悪を懲罰すべき使命を象徴してゐる。かゝる団体は国粹党と称するよりも、我友金内良輔君が訳したる国柱党の方が遙かに當つてゐる。更に平易に称するならば斧鉞を採つてまさかり党と言つても宜い。まさかり党は直ちに金太郎を連想せしむる。若し夫れかゝるフアスシスチーを反動派と訳するのは如何なる理由であるか。素より郵便、電信、鉄道の国有を私有に移さんとするなど聊か他国の政策と相違するものありとは言へ、社会主義、共産主義、無政府主義に反対するの故を以て直ちに反動派と称することは心得難い。物理学



の動反動を以て世界の大勢を判断せんとする思想それ自身が反動思想である。<sup>31</sup>

ムッソリーニと「ファシスチー」を金太郎と「まさかり党」に比したのはともかく、満川は、それらを「動」か「反動」かではなく、「動」をいかにして「動」によつてとらえるかで判断すべきだという。これは「老壮会」「猶存社」<sup>32</sup>など国家改造運動に従事してきた彼の自負であると同時に、輸入ではなく自生する「改造」を試みようとするムッソリーニへの共感でもあったと思われるが、ここに「反動」ではないイタリア・ファシズム像が描き出されている。

### 三 「反動」の多様化と「スピリット」の有無

では、イタリア・ファシズムを「反動」とみなすことに疑問が呈されるなか、これまでファシズムを「国粹」「反動」とした「所謂左傾派」はいかなる論を展開したのか。一九二二年下旬で注目されるファシズム論として、「FASCISM IN JAPAN」<sup>33</sup>がある。これは日本共産党創立期の一九二二年一〇月頃に執筆された「おそらく日本で初めての、マルクス主義的なファシズム論」であり、「独文プロフィンテルン機関誌『赤色労働組合インタナショナル』一九二三年七月号に掲載されたI・アオキ「荒畑寒村」、C・マツモト「前進するファシズム」のオリジナル英文原稿」だとされる。<sup>34</sup>

同文書には加筆箇所も見られるためどこまでがオリジナルかを判断するのは難しいが、ここで「FASCISM IN JAPAN」として挙げられる対象は、大日本国粋会、大和民労会など、またその背後の政府、警察、資本家であり、事例を挙げながら、「彼らの目的は、無防備の日本プロレタリアートをすっかり抑えつけ、資本にたいして奴隷的屈従を強いること」と述べられる。<sup>35</sup>ただ、「FASCISM IN JAPAN」に大日本国粋会、大和民労会を該当させる論調は、イタリア・ファシズムと大日本国粋会の違いを明らかにした前掲瀧山四郎論文（『改造』一九二二年五月一日号）を越えるものではない。

これに対して注目されるのが、新居格「ファシスチー——近状、本体、並にその将来——」（『改造』同年一二月一

日号)である。彼は論を始めるにあたり二つの重要な異議を呈している。ひとつはイタリア・ファシズムを「国粹党」と規定することへの異議である。新居は、「過激派」が聞く人に誤解を与えたように、「国粹党」と呼ぶのは適さず、むしろ、大日本国粋会とは「その構成分子なりその状態なりが全然違つて居る」とし、この理由に、「ムソリーニは元を質せば極端な社会主義者であつた。また同党には外くのサンデカリストも居る」ことを挙げた。<sup>36</sup>

そして、もうひとつの異議とは、「国家主義者」からイタリア・ファシズムへの共感に対してであつた。彼らはケマル・パシヤやムソリーニの活躍を「世界思潮に転期が来たのではないかと誤信し」ているが、新居は、「国家主義者」に釘を指すためにも、「ファスシスチー」を「伊国国粋党」と訳さずそのまま表記せよという。<sup>37</sup> 新居はここで過激派やケマル・パシヤに言及するが、前掲満川論文と奇妙な対をなす。ただ、イタリア・ファシズムを「国粋」のみならず、「反動」とみなすことにも違和感を表す満川に対して、新居は前者のみを批判するにとどまつた。これはアナキスト新居にすれば当然だが、ここで新居が問題とするのは、なぜイタリア・ファシズムと従来対立的に解されてきた「社会主義者」や「サンデカリスト」が関与しているのかである。

新居は、ひとつは政治との関係、もうひとつは労働との関係からこの問題を分析する。まず前者における興味深い指摘として、当初は「帝国主義的膨張と対外的愛国的情熱」が強かつた「ファスシスチー」が大戦以後は「対外の敵を失つてから対外の抗敵——社会党、共産党——へとスライドさせたこと、また共産党及び社会党打倒への手段として「ムソリーニなどが以前社会党員並にサンデカリストであつたことから習得した戦術と、軍隊から得来つた訓練とを結合したものと述べられたことである」。<sup>38</sup>

ムソリーニの出自が社会主義弾圧に影響を与えたことを直視するこの新居の姿勢は、『改造』一九二二年一月一日号のアンケートで「ファスシスチー」を「反動的」だと規定したときと異なっている。しかも、新居はたえず敵を見出すことで自らの命を永らえるイタリア・ファシズムの本質を鋭く突いているうえ、彼らの新たな敵として「社会党」及び「共産党」が見出されたことを指摘し、イタリア・ファシズムが必ずしも当初からそれらと対立するものではなかつ

たことを伝えた。

このあと新居が言及するのが、イタリア・ファシズムと労働者との関係である。既に前掲太田論文でこの関係は触れられていたが、新居論文では、両者の関係が「ファスシスチー団がヒウーメを占領せんとした時から既に初まつてゐる」こと、また海員組合の「ファスシスチー」支持や工場占拠事件において「社会党が弱気であつたために労働者の革命的の意気沮喪を与へられ却つてファスシスチーに傾いた」ことが新たに指摘された。<sup>55</sup> しかも、新居の言及はこれにとどまることなく、「ファスシスチー」に「旧出征軍人」「国家主義的の狂熱的な青年」のみならず、「サンデカリストの一派」まで参加していたことを伝えている。<sup>56</sup>

問題は、新居が、労働者や「サンデカリストの一派」の「ファスシスチー」参加に、また「ファスシスチー」は「反動」であるという自身の言説にどのように向き合つたかである。注目すべきは、新居が、「旧出征軍人、国家主義的青年等」のみならず、「労働者特にサンデカリスチックな情熱的労働者の一部がファスシスチーに至つた」ことを指摘しながら、こうした動きを「工場占領時代に於ける共産党特に社会党の弱気にたいする反動的運動」と呼んだことである。<sup>57</sup>ここでは、「反動」が肯定的な意味で用いられているが、続けて新居は、

それを繰言するなら、ファスシスチーは社会主義にたいする国家主義者の国粹的反動と、而して意味は多少違ふが矢張り、社会主義特に社会党の因循にたいする一部労働者の弾効的反動との結合と思へないであらうか。

又政治的に見れば諸政党徒に分立してそれを巧みに操縦する妥協的政治状態にたいする、保守的ながら一本氣の非妥協的反動とも思へるのである。<sup>58</sup>

と述べた。ただここで、新居は「ファスシスチー」を「国粹党」のみならず、「反動」と捉えることにも異議を呈すべきだつたのではないか。「ファスシスチー」をあくまで「反動」と結びつける新居は、上記引用で、「社会党の因循」への「弾効的反動」、また「妥協的政治状態」に対する「一本氣の非妥協的反動」まで用いてこの等式を維持しようとするが、無理があつた。上記引用の直後に、新居は、「ファスシスチー」には「一揆」「社会主義者の見る如き白色恐怖」

「資本主義者に雇はれた同盟罷業破り」「立憲諸政党の考えるやうな法的手続を破壊し、憲法的保障を蹂躪する所」などの側面があるとして、「要するに反動的暴力主義の団体である事は事実だ」と結論した。<sup>55</sup>

また、最後の節で、「フアスシスチー」の将来を語る新居は、それを「必竟一時の変態的反動」<sup>56</sup>だとしてその永続性に疑問を呈したうえ、政權運営、財政政策、外交に関しその行き詰まりを予想する。これが今日から見て樂觀的であることはいうまでもないが、彼がこの後述べる「フアスシスチー」と労働者、社会主義者（特に「サンデカリスト」との関係についても同様であつた。新居は、「サンデカリストや、農業労働者」から「フアスシスチーの労働組織」への参加の永続性に疑問符を付け、「フアスシスチーの新労働組織の決議案」を紹介しながら、「これが果してサンデカリストが本当にスピリットあるサンデカリストであるならば甘諾しうる条項だらうか。フアスシスチーの暴力主義とサンデカリズムの暴力説とは形式は同じ暴力であつても思想が違ふ。分かれる日がやがて来るであらう」として、「フアスシスチー」と「サンデカリズム」の思想の違いを際立たせることで、「反動」の問題を「サンデカリスト」個人における「スピリット」の有無に帰した。<sup>57</sup>

最後に新居は、「今の所、フアスシスチーは人旺んにして天に勝つてるとでも云ふのであらう。天さえ定まれば問題はないのである。詰り、フアスシスチーはその間の勢力であるに過ぎない」<sup>58</sup>と結論したが、こうした思想の純化によつて、はたして「フアスシスチー」を「その間の勢力」にとどめることができるか否か、そのことが次第に新居に感得されてきたとき、彼のなかで「フアスシスチー」と社会主義、労働者との関係や「反動」の意味がいかなる変容を遂げるかは後節で触れる。

#### 四 「経綸学盟」結成と上杉慎吉の「フアシスチ団」批判

一九二三年に入り、愛国運動の方も新しい展開を迎えている。これまで「反動」の代名詞だった大日本国粋会、大和

民労会に続き、同年一月、「経綸学盟」が創立された。<sup>4</sup>その創立者が国家社会主義者高畠素之と東京帝国大学教授上杉愼吉とであつたため、そのインパクトは大きく、この動きに反応した『改造』が同年三月一日号で特集「新興愛国団体批判」(ただし目次では「新興愛国団体解剖」)を組んでいる。寄稿家と論題は、馬場恒吾「愛国団体に対する考察」、堺利彦「和製ムソリーニと国粹民労」、中山啓「上杉氏と高畠氏が提携するまで」、桜木秀一「各種愛国団の首脳者」、加藤一夫「俠客の精神」、室伏高信「愛国悲愛国」、新居格「反動運動のいろいろ」、赤松克麿「反動運動所観」、山川均「武装した反動運動」、上杉愼吉「唯だ国体の精華を發揚するのみ」、高畠素之「国家社会主義でゆく」である。

特集の目玉は渦中の高畠、上杉の両論文、そして高畠と上杉との關係を描いた高畠一党の中山論文である。中山は、ムソソリーニ政権奪取を聞いた高畠たちが「ムソソリーニ万歳、革命万歳」を叫び、あるものは「ムソソリーニ万歳を唱へつゝ、電柱を抱いて接吻をし」、高畠は「しきりに一步をムソソリーニに先ぜられたのを悔しがつて、唇を噛み、唇からは血が滲み出し」、あるものは「嗚呼この腕を如何せんと云つて板壁を撲つて穴をあけ、一ヶ月もペンを持てない程に骨を痛めた」という姿を描く。<sup>5</sup>接吻や鉄拳など脚色もいくらかあるが、ムソソリーニの政権獲得に触発されて沸きあがつた彼らの「決心」が経綸学盟結成へといざなうことになったことはわかる。

また、イタリアでの政変と同時期の一九二二年一〇月、高畠らが創刊した雑誌『局外』に、短文を寄せた高畠は、「フアスシスチ党の崛起ほど痛快な皮肉はない」として、その理由のひとつに「共産党やサンチカリストの暴力が手もなく逆用されたこと」、そして、「国粹主義者といはれるフアスシスチが社会党や共産党の国家主義、国有主義を攻撃してゐること」を挙げて、「彼等は『国民は国家よりも貴重なり』との標榜の下に、片ツぱちから産業の民営還元を強行して居る。産業集中に反対の無政府主義も、斯う出られては商売になるまい」と述べた。<sup>6</sup>そのうえで、高畠は「要するに人生は複雑である。新しいものは古いものを利用し古いものは新しいものを利用する。新しいと称するものが必ずしも新しいものばかりではなく古いものにも存外新しい所がある」として「ポリシエ井ズムとフアスシズムと、何方が新しくて、何方が古いかは、必ずしも簡単な問題ではない」という感想を漏らしている。<sup>7</sup>

経綸学盟関係者以外の目からみたとき、この団体はイタリア・ファシズムとは無縁でなかった。上記の特集に寄稿した赤松克麿は「反動団体としては最も高級のもの」である経綸学盟について、「本質は保守的であつても、一面新しい時勢に対する用意を見せて居るから、宣伝が旨く効を奏して、運動の組織が整頓して居れば或る程度の勢力を占めるかも知れない」と述べながら、「狂熱的な愛国運動がイタリアのファシスチ党程の成功を収めるかどうか疑問である。僕はこの種の運動は我国では大したことは無いやうに思はれる」として、その影響力を疑問視しながらも、経綸学盟に「ファシスチ党」への可能性を読み込んだ。<sup>82</sup>

ただ、経綸学盟は「イタリーのファシスチ党」を目指していたわけではない。結成者の一人上杉愼吉は、特集寄稿論文「唯だ国体の精華を發揚するのみ」で、経綸学盟を「愛国党」「伊太利のファシスチ団」と同様に捉える言説を「甚だ不快なり」と述べている。<sup>83</sup>問題は、上杉が経綸学盟を「ファシスチ団」と峻別するとき、彼の「ファシスチ団」像がいかなるものであつたかである。上杉は「ファシスチ団」を「愛国の熱血湧くが如く有為の青年は、伊太利滅亡秩の秋に迫れりと為し、猛然として起つて狂瀾を既倒に回へし、祖国の光榮の爲めに身命を擲たんとせるもの」<sup>84</sup>と述べるが、これは前掲満川論文や新居論文以前のイタリア・ファシズム論を踏襲していたにすぎないことがわかる。

では、上杉にとって経綸学盟とはいかなるもので、またイタリア・ファシズムといかに異なるのか。彼によれば、経綸学盟は「全然学校の組織たらん」とするものであり、「同志と共に有為の青年を薰陶して、国恩に報ずるに足る人材を造り成さんこと」が設立目的であつた。<sup>85</sup>確かにこれが経綸学盟なら、「ファシスチ団」とはみなせないが、この後上杉が「ファシスチ団」と峻別するために挙げた理由が興味深い。彼は「我々の志は正に彼等〔「ファシスチ団」〕と異なるなきも、我が金甌無欠の日本に於て、毫も彼に於けるが如き事情は發生して居らぬ」<sup>86</sup>として、「社会主義共產主義」が振るわない日本で「ファシスチ団」は存在しえないと述べる。

しかも、上杉は「ファシスチ団」は社会主義、共產主義を排するが、経綸学盟は必ずしもそうではないとして、「国家と社会とは離れたる別個のものではない、国家は理想的なる社会」、「我が同志の内に社会主義者あらば、彼は最も徹

底せる国家主義者」と述べた。<sup>82</sup> また、「労働者」にも言及する上杉は、「親より伝へたる筋骨の外何物をも有せざる労働者の、一と筋なる尊皇報国の精神が、かの街路に革命歌を唱へ、工場に怠業する極めて少数なる病的労働者のために、蔽はれて見はれざるは、実に遺憾千万」と述べ、「尊皇報国の精神」を「病的労働者」から救い出そうとした。<sup>83</sup>

前掲新居論文では、「サンデカリスト」「労働者」を自陣に取り込むイタリア・ファシズム像が描かれていたが、上記の上杉の主張を見れば、上杉の意図とは別に、経綸学盟が「ファシスチ団」にもなりうることを自ら証しているのではないか。しかも、このあと、「内に於て思ひ切たる大改革を断行し、国体の精華を發揚する所以を阻害する一切の制度を除却し、茲に真正の日本を建設」<sup>84</sup>せんとする上杉は、自著の『国体精華乃發揚 真正日本乃建設 挙国一致乃提唱』（一九一九年一月、洛陽堂）から以下の文を引用した。

…以て挙国を一致し、六千万人の力を十倍倍して、帝国の使命を達成すべし、如何にしてか之を實現すべき、之予の不肖を顧みず本書を著はして、国体精華の發揚を提唱する所以なり、而して其の要目とする所凡そ六一に曰く、思想を淘汰して挙国一心ならしむ二に曰く、挙国を総動と具し国威の宣揚を期す三に曰く、挙国皆兵を實現して大に軍国主義を行ふ、四に曰く資本と労働とを統制して挙国經濟を一にす、五に曰く民生を整理し国粹を保守して挙国一民ならしむ、六に曰く大権中心の実を挙げ政府を革新し挙国選挙の制を定む、此れ等の事たる皆非常の事たり、非常の決心覺悟を以てするに非ざるよりは之を成就すべからず、彼の時流に浮游して漫に改造を云ふが如き者の与る所に非ず、深く団体に根柢し、確固不動の基礎に立脚し、建国の理想に復るを期して、初めて大改造を行ふべきのみ、今は悠々たる議論に日を消するの秋に非ず、少壮有為の士奮発興起して、自ら国家を斯の難局に濟ひ、大日本の建設に当るの大覺悟を定めざるべからず<sup>85</sup>。

自らの主張を「ファシスチ団」と厳しく峻別する上杉だったが、ここに挙げられた六つの要目は、一九三〇年代の総力戦体制下の「社会革命」<sup>「次進目」</sup>を想起させて興味深い。<sup>86</sup> 同稿の最後で上杉は、「我々は極端なる保守党である、而して徹底的革新党である、否□之に当るの人を養ふの学校である」<sup>87</sup>と述べたが、この「保守」と「革新」の交錯も彼の目指

す「華国一致」という土台があつてこそであつた。<sup>22</sup>

## 五 コミンテルン第四回大会紹介と田口運蔵の左派「共同戦線」論

『改造』で特集が組まれたのと同じ頃、日本のイタリア・ファシズム論を見るうえで重要な出来事が二つあつた。ひとつはコミンテルン第四回大会（一九二二年一月一日～五日）、もうひとつは日本共産党合法機関誌『赤旗』創刊（一九二三年四月）である。同大会は、前月のムツソリーニ政権樹立のためファシズムが克服すべき重要な問題として掲げられた。<sup>23</sup> コミンテルン第四回大会は、雑誌『前衛』一九二三年二月一日号から始まつた連載「共産党インタナショナル第四回大会」（計五回）で日本の読者に伝えられている（第一、二回は『前衛』に、第三回から第五回までは後継誌『赤旗』に掲載）。本節では、この連載における大会議長ジノ・ヴィエフ（Григорий Евсеевич Зиновьев）、カール・ラデック（Karl Radek）、イタリア共産党ボルディーガ（Amadeo Bordiga）の諸報告の邦訳に着目し、彼らのイタリア・ファシズム論がいかに日本に紹介されたかを見ていく。

連載第二回目掲載のジノ・ヴィエフ報告では、まず「吾々は事実を直観せねばならぬ」として、「吾が共産党の試練時代」（「ファシズムの時代」）は「固より世界革命を断絶させ得るものではない。それは革命の一過程である。何故かといふと、革命運動は必ずしも一直線に進むものではないから」という彼の発言が紹介された。<sup>24</sup>

次に、カール・ラデックの報告「資本の攻勢」は、今日の研究では、「第四回大会でファシズムに関して最も詳細に言及した」ものであり、イタリア・ファシズムの雑居性の指摘、またイタリア・ファシズムの勝利を社会主義、共産主義が世界革命の時代の開始以来に蒙つた最大の敗北とみなした点に特色があるとされている。<sup>25</sup> ただ、『赤旗』掲載のイタリア・ファシズムに関するラデックの発言は、「今日の世界の形勢は、恰も一八四九年のそれに似通つてゐる。当時は増大する資本の勢力を基礎とする反革命的時代であつた。反革命は民衆にパンを与へることが出来た。今日の反革命の



基礎は、資本主義の行詰りである。経済的危機は一般的であつて、ブルジョアジーは暴力によつて、空しく崩潰を阻止しようとしてゐる」<sup>②</sup>のみであつた。

これらに比して、連載でもっともイタリア・ファシズムに言及しているのが、イタリア共産党代表ボルデイーガの報告である。この連載で、ボルデイーガは、「ファスシスチ」支持勢力として「国家」「ブルジョアと地主」「失意的な中産階級」を挙げ、また「ファスシスチ」の「長所と特長」として「その組織と、その規律と、その統率」を挙げた。<sup>③</sup>このあと彼は、「ファスシスチ」には「資本主義の経済制度を如何にして再興するか」という課題が横たわると述べつつ、「ファスシスチは資本主義の破滅期に於けるブルジョアの特殊な国家統制機関」と定義した。<sup>④</sup>

では、連載「共産党インタナショナル第四回大会」でイタリア・ファシズムに関するコミンテルン見解が日本の読者に紹介されるなか、『前衛』ではいかなるイタリア・ファシズム論が展開されていたのか。ここで取り上げるのは、田口運蔵「ファスシズムの由来と本質」(『前衛』一九二三年一月一日号)である。同稿は、これまで見てきたイタリア・ファシズム論と比して二つの点で特徴的であつた。ひとつは題から明らかなように、この時期日本で多用された「ファスシスチー」という表記が使われてないことであるが、これは田口が日本のイタリア・ファシズム論にのみ依拠していなかったことを示している。

一八九二年五月、新潟県に生まれた田口は、一九一八年初頭、「海外放浪」を経て、ニューヨークへ到着、ここで片山潜と出会い、彼に傾倒するなかで、次第に社会主義運動家として成長していく。そして、一九二〇年三月、彼は片山からコミンテルン第三回大会の日本代表に指名され、翌月にはロシアへ向け出発、コミンテルン第三回大会出席、レーニンとの会見、プロフィンテルン創立大会出席などを経て、極東勤労者大会の準備に奔走する。一九二二年七月頃に田口はモスクワを出発、ベルリン、パリ、ロンドンを経て、同年十一月に長崎へ到着し、その後、東京と故郷の新潟も訪れた。<sup>⑤</sup>問題は、彼が「ファスシズムの由来と本質」執筆時にコミンテルン第四回大会(一九二二年十一月五日から一ヶ月開催)の報告や諸決議を見聞していたか否かだが、伝記では言及されていない。

田口は、「ファシスト運動の本質と由来」の分析から、日本において「ファシズム」へと至らない途を見極めようとする。「ファシスト運動」の由来から考察する彼は、「中産階級」（「下層中流階級」<sup>73</sup>ともある）に注目する。田口にとつて問題だったのは、なぜこの階級が「ファシスト運動」に依拠したかであつた。彼はその答えに、「プロレタリアートの政党へも経済的組合へも入会を拒まれたるこの種中産階級は、如何にイタリアのプロレタリアートの勢力が強大なるかに驚ろき出した」こと、そして「中産階級」が「ファシストはこの怖るべき労働独裁及び社会主義の権力濫用に反抗して立つた代表団体である」と見做して来た事<sup>74</sup>を挙げた。

「中産階級」による「プロレタリアート」への敵意は、これまで紹介したイタリア・ファシズム論でも指摘されていたが、田口の論がこれらの論と異なるのは、彼が「中産階級」と「ブルジョア」との関係に焦点をあてたことであり、この論のもうひとつの特徴はここにあつた。また、田口は、これまで「ブルジョア」の走狗や傀儡とみなされてきたイタリア・ファシズムを「ブルジョアが唯一の道具として利用してゐた、ファシズムがブルジョア制度の内部からの危機と云ふ新しい原動力となつて来た」と定義したうえ、「ファシストは中産階級及び知識分子、及び浮浪人、失業者、これ等のいづれも資本家と本質に於て異つてゐる要素から構成せられてゐた」として、「ファシスト」構成分子に「中産階級」のみならず、「浮浪人」、「失業者」という人びとも挙げたこともこれまで取り上げてきたイタリア・ファシズム論と異なっている。<sup>75</sup>

このあと「ファシスト」と「ブルジョア」の関係に迫る田口は、「ファシスト」が「真にブルジョアの前衛」だという旧説に疑問符を付けつつ、「ファシスト」が「全くのテロリズムの実行団ではあるが、中産階級の消費者から同情を得んとつとめてゐる」こと、それゆえ、「ファシスト」は「それ（「ファシスト」）を組織する第一要素たる中産階級の主張と實際利益とのため活動し、そしてそれで進まんと努めてゐる者」と定義したが、この「消費者」との関係への着目、次の指摘「大日本帝国で一寸の間、マルクスを読んで万丈の気焔を挙げた事のある例の高島一派の大衆運動が全く、論理的にも事実に於てもこのファシスト運動と一致して来る」（経綸学盟結成は同稿掲載直後）へと繋がっている。<sup>76</sup>

田口が今後の展望として述べるのは、中産階級をいかにして自らの陣営へとりこむかであった。彼が呈示する方法は、共産党を中心とした左派「共同戦線」によつて「ファシスト運動」への対抗であり、最後に田口は「反動運動の一有力の反動として起つた運動が目下のブルジョアに反抗する『戦線一致』即ち『共同戦線』の運動」だとして、「ファシスト運動」という「反動」の興隆に「動」のさらなる飛躍を見て取つた。<sup>24</sup>

## 六 「革命」としての「ファスチスチ」と「日本的なもの」への視線

一九二三年初頭の経緯学盟結成や、『前衛』で田口運藏のイタリア・ファシズム論が掲載されるなか、先の『改造』一九二三年三月一日号の特集「新興愛国団体批判」で、社会主義者の山川均や堺利彦、また加藤一夫、新居格は、いかなる論を展開していたのか。堺は「和製ムソリニと国粹民衆」、山川は「武装した反動団体」、加藤は「俠客の精神」、新居は「反動運動所感」をそれぞれ寄せたが、本節では山川と新居の論文をとりあげる。

第一節で触れた山川の「外国の国粹会」（一九二二年一月）から「武装した反動団体」（翌年三月）までの間に起つた事象として、ローマ進軍のほかに、山川均「無産階級運動の方向転換」（『前衛』一九二二年八月一日号）が発表されている。同稿は、無産階級の前衛化を経た無産階級運動がいまや「大衆」を動かすべきことを説いたものであり、日本社会主義運動における前年からのアナ（アナルコ・サンジカリズム）・ボル（ボルシェビキ）対立に、ボルの勝利を導くうえで重要な役割を果たした。またこの論では、「先づ十人か二十人の御常連が集つて、革命の翌日を空想して気焰を揚げると、巡查を相手に『革命的』行動に出て、一晚の検束を受けて大に『反逆の精神』を満足させる位が関の山」として、山川自身におけるサンジカリズム的傾向の批判と、従来の「革命」観への批判が試みられている。<sup>25</sup>

問題は、こうした彼の「革命」観の「方向転換」が彼のイタリア・ファシズム論にいかなる変化を与えたかである。「武装した反動団体」で、山川はその「最も光輝ある実例」として「伊太利のファスチスチ」を挙げる。以前の原稿と

異なり、ローマ進軍が山川の中で意識されたためか、この原稿では、イタリア・ファシズムが「反動団体」とされながらも、対立する「革命的勢力」(「中産階級化した社会党と□<sup>一字差</sup>経済行動の『独立』と『政治的中立』といふ古い組合心理に墮落した労働総同盟」)と「支配階級」の間に位置づけられる。<sup>2</sup>

そして、この定位は次の二つの変化をもたらしている。ひとつは「反動」としてのファシズム像の変化である。山川は同稿冒頭で、大日本国粋会、大和民労会、桐花会、老壮会、経緯学盟、猶存社、黒龍会など「反動団体」の名をいくつか挙げながら、「大ざっぱには、皆な一様に愛国主義の団体と見做されて居る」と定義し直したあと、「尤も是等の団体は、同時に一面には、総括して反動主義の団体と見做されて居る。そこで今日の世の中——専門の愛国家を必要とする世の中——では、『愛国』といふ言葉と『反動』といふ言葉とは、精密に同意語でないまでも、可なりに密接な関係のある言葉となつて居ることが分る」と続けて、「反動」を「愛国」と結び付けようとする。<sup>3</sup>

山川はこの理由を明示していないが、この理由を考える上で示唆を与えてくれるのが、もうひとつの変化である。それは、彼の「革命」観に関わるものだが、注目されるのは社会主義者山川均が「革命」を「反動団体」と結び付けていることである。だが、誤解を招かないためにもまずはそれが叙述された箇所を引用しよう。

伊太利の資本家政府は、民衆の革命的勢力に対抗する必要から、この武装した反動団体の運動を黙認して居つた。時には之を助けてゐた。そして武装した反動団体が、革命的勢力に対して政府の利益になつてゐた範圍に於ては、それは革命に対する現状維持の勢力であつた。けれども武装した反動団体の存在と行動とを許るし、国家がその存在の為に是等の武装団体の力を籍つた——乃至は籍らなければならなかつた——程度だけは、その国家は、国家としての実力を失つて居るのである。その国家の機関は、それだけ武装した私人の団体によつて取つて代られて居るのである、そこで民衆の革命に対する現在の秩序の維持と擁護とに出發する武装した反動団体の行動は、その結論まで進展すれば、一種の革命であると云つてよい。国家が此の種の武装団体の存在を認め、その行動を許すことは革命の權利を公認したものである。<sup>4</sup> 維と擁護とに出發する武装的の団体行動は、その結論に於ては、一種の反動

主義の革命であると云つてよい。

斯ように現在の資本主義的国家に、多かれ少かれ武装した反動団体の存在が許るされて居ることは、その程度だけ、資本主義の×××××「国家が廃滅」<sup>22</sup>しかけて居ることを意味して居る。そして資本主義の国家が、事実上、革命的行動を承認したことを意味して居る。<sup>23</sup>

山川はここで「反動団体」の行動が「一種の革命」であるというが、こうした「革命」を彼が「革命」と認めたわけではないこと、また「反動団体」を評価するためにそう述べたわけではないのは明らかである。山川がここで意図したのは、「革命」を「反動団体」に結びつけることで、国家自らが「革命」の権利を公認したことを強調し、国家（資本主義国家）を消滅への道程に位置づけることであつた。そして、この批判によつて、国家と「反動団体」との關係に釘を刺し、「反動団体」をもまた消滅への道程に位置づけることがここでは試みられている。

堺や山川らの論のほかに、加藤一夫「俠客の精神」と新居格「反動運動所感」などアナキストからの寄稿もあつたが、ここでは新居格を取り上げる。既述のように、新居は、「ファスシスチー 近状、本体、並びにその将来」（『改造』一九二二年二月一日号）で、イタリア・ファシズムを「国粹党」とみなすことに疑問を呈し、「反動」の意味を多様化させていた。ただ、このときと違って、「反動運動所感」では、日本における「反動運動」（大日本国粹会）が考察の主な対象となる。

新居がまず述べるのは、「日本の国粹会と伊太利のファスシスチーは本質的に相異がある」ことであつたが、重要な相違として「ファスシスチー」が「元は極端な社会主義者であつたムツソリーニの統率になる」こと、「官製ではない」こと、そして「両者は發生の動機構成分子の内容が違ふ」ことが挙げられる。<sup>24</sup>それゆえ、「日本でかりにファスシスチー類似のものが發生するとすればこれから先きの問題であつてこれまでの問題ではない」<sup>25</sup>と述べる新居は、今後の日本におけるファシズム發生の可能性とその抑止について考察する。

新居は「ファスシスチー」と大日本国粹会との相違を以前から指摘していたが、今度はこの不等式を引き継ぎながら、

大日本国粋会へと焦点を移している。ただ、この論稿で重要なのは、新居が以前のように他の「サンデカリスト」を「スピリット」の有無で判断するのではなく、自らの実感としてある「日本的なもの」と向き合おうとしたことにある。

僕は社会理論を考へない場合、さうしてボンヤリとこの国の事を情緒の上で感受するとき、僕は慥かにこの国の風土的情感に浸たる。それは数次云ふことであるが、植物の持つ風姿にも、氣候が齎らす特殊な情景にも、僕は矢張り日本的なものを持つだけは否定が出来ぬ。その情感が民族精神とどう交渉するかは別として理窟抜きに以上の事だけは云ひうる。

しかしながら、その情感を別にして理論の範圍に踏み込むと僕は反資本主義が鮮明となる。理論の点ではインタアナシヨナリズムでありうる。しかし徹底したインタアナシヨナリズムになり得ても情感だけでは風土的な匂ひが抜け切らない。これが僕の現在持つ実感である。☺

これは以前、アンケート「一九二二年以後に於ける社会運動及學術界の趨勢並に傾向」『改造』一九二二年一月一日号)に対し、「理性の真理」の時代から「感覺の真理」の時代への移行を予測した新居だからこそその發言であらう。つまり、理性では「インタアナシヨナリズム」であらんとする新居が、「感覺」や「情感」における「日本的なもの」と眞摯に向かい合おうとする姿勢がここにはある。彼が問題としたのは、「日本的なもの」が「民族精神」といかに交渉するかである。

このあと、新居は、第三インターナショナル第四回大会(同年十一月五日)での諸決議に触れながら、「インタアナシヨナリズムとナシヨナリズムとの分流が今の世界の各国に交流しつゝある」☺として世界各国に波及する左右兩翼の戦いに触れたあと、次のように述べた。

理論としてのインタアナシヨナリズムが現実に存するナシヨナリズムとどう抱合して行くかは實際問題として或る期間重大なものと僕は考へるのである。

尤も愛国主義がその民族性を持たず、迷妄にして固陋なるものである限り、それは自然に滅びる運命を有すべき

だ。

誤まれる愛国主義に就いて論すべき点は多々ある。しかし、それを今一々指摘するのは面倒臭い。一々指摘しないまでも合理性に即するものゝ明知しうる事だから。

僕は何よりも先づ儼然たる事実と存在する社会事実に着眼すべきだと思ふ。そうするとそこにある階級対峙の事実を見逃がす事が出来ない。不合理不平等の存在を閑却して何の生活指標がありえるのだ。そこに僕の囚はれない現実的社会主義の理論が生ずる。その根拠が一切の反動的現象と相容れない所である。☹

新居は明言しないが、「極端な社会主義者」ムツソリーニがなぜファシズムへいたったのかを自らの問題として引き受け、問い続けていたのではないか。新居は「愛国主義」と「民族性」との交錯を危険視し、「理論としてのインタアナシヨナリズム」が「現実存するナシヨナリズム」、あるいは先の引用の「情感」における「日本的なもの」といかなる関係であるべきかを考える。むろん、新居が「理論としてのインタアナシヨナリズム」に疑問符を付けたことは、彼自身の「感覚」における「日本的なもの」の存在を自ら打ち明けたことや、彼が見出した答えが「儼然たる事実と存在する社会事実」「階級対峙の事実」「不合理不平等の存在」であることが裏付けける。これがはたして新居が問題とする「日本的なもの」と「民族精神」の交錯に楔を打ち込むのかは今後の検証を必要とするが、新居の姿勢は当時イタリア・ファシズムや大日本国粋会を「反動」と呼びながら、自らの「感覚」や「情感」における「反動」性に対して無自覚な人々への根底的な批判になりうるものであった。

## おわりに

本稿は、一九二〇年代におけるイタリア・ファシズム受容に焦点をあてながら、「革命」と「反動」の間で揺らぐイタリア・ファシズム像を描き出した。以下、行論をまとめる。

まずローマ進軍以前と以後の時代にわけ、以前では、山川均、新居格、瀧山四郎の論でイタリア・ファシズムが「国粋」「反動」と結び付けられていたことを述べた。以後では、右傾雑誌でのイタリア・ファシズム論登場や満川龜太郎によるイタリア・ファシズムⅡ「反動」への問題提起を取り上げたほか、ローマ進軍が新居のイタリア・ファシズム論に与えた影響に注目し、彼がイタリア・ファシズムを「国粋」とみなすことに反対しながらも、「反動」の意味を多様化させ、そこに肯定的な意味を盛り込んだことを論じた。

次に、日本におけるファシズムへの危機感が現れ始めたことを、経綸学盟を巡る諸言説から明らかにし、結成者の一人上杉愼吉のイタリア・ファシズム批判と経綸学盟の旗幟に、一九三〇年代総力戦体制下の戦時変革への萌芽を見出した。その一方で、同時期に日本に紹介されはじめるコミンテルンのファシズム論にも着目し、『前衛』『赤旗』に掲載されたコミンテルン第四回大会のファシズムに関する諸決議の紹介とその断片性を指摘しつつ、田口運蔵のイタリア・ファシズム論を取り上げた。「中産階級」と「ブルジョア」との分析から、イタリア・ファシズムを「ブルジョア制度の内部からの危機」と位置づけ、その構成分子に「浮浪人」や「失業者」も挙げる彼の論は、その対ファシズムへの左派共同戦線の提起と相俟って、これまでのイタリア・ファシズム論とは異なっていた。

また山川均は、「反動」「革命」の再規定から「革命」を「反動団体」に結びつけ、国家自らの「革命」公認を強調し、国家（資本主義国家）と「反動団体」を消滅への道程に位置づけようとしたほか、理性では「インタアナシヨナリズム」であろうとした新居が、「感覚」や「情感」における「日本的なもの」と真摯に向かい合う姿勢で「ナシヨナリズム」に対峙しようとしていた。

以上から明らかにように、本稿は、「日本ファシズム」実在の証明を目的としたものではない。その考察の目的は、一九二〇年代初頭に、イタリア・ファシズムが日本の社会運動家にどのように受取られたか、また彼らの「革命」観にかなる影響を与えたかであった。

上杉が提起する国民総力戦による思想及び労資間対立の解消と日本「改造」への移行は、一九三〇年代における戦時



変革の萌芽になるうるものであった。ここでは主に国内変革が重視されるが、問題はこの変革を貫く「大日本」建設への志向に対し、社会主義者がどのような抵抗線を築くことができたかである。

山川のファシズム論は、自らを「革命」的主体から相対化させて、「反動団体」を「革命」と規定し、国家自らの「革命」権利の公認を強調することで、国家（資本主義国家）及び「反動団体」を消滅への道程に位置づけるという注目すべきものであった。問題は、山川が「方向転換」で向き合おうとした「大衆」が国家消滅を望んでいたのか、それとも、上杉のいう「一と筋なる尊皇報国の精神」の持ち主であったか否かだが、関東大震災（一九二三年九月）による危機意識の高揚は後者であることを教えた。これに対し、新居は、山川と同じく、自らを「革命」的主体から相対化させながらも、人間の「情感」や「感覚」における「日本的なもの」とその「民族精神」との関係に注目し、「現実に存するナシヨナリズム」に向き合うことから、「インタアナシヨナリズム」を目指そうとした。

## 註

『吉見義明「戦前における「日本ファシズム」観の変遷——一九三一年から一九三七年まで——』《歴史学研究》一九七七年一二月一日、歴史学研究会、神田文人『日本の統一戦線運動——その歴史的経験——』（一九七九年九月、青木書店）などを参照。

『伊藤之雄『大正デモクラシーと政党政治』一五二頁、一九八七年十一月、山川出版社。伊藤によれば、ムツソリーニとファシスト党がイタリアの中央政治に影響を与える頃から『東京朝日新聞』『東京日日新聞』でも彼らに関する記事が開始めるが、国内秩序の安定化やフィウメ問題の解決などを理由に、新聞論調はおおむねムツソリーニに好評価であったとされる。

3. 山崎充彦「イタリア・ファシズム、その日本における受容と表現形態——「英雄としてのムッソリーニ像」の生成」、『FASCISMO nel Giappone』関静雄編『「大正」再考 希望と不安の時代』二〇〇七年二月、ミネルヴァ書房。なお、昭和初期のムッソリーニ英雄論を分析したものに、吉村道男「昭和初期の社会状況下における日本人のムッソリーニ像——英雄待望論の側面——」、『日本歴史』一九八九年一〇月一日、吉川弘文館）がある。

4. この時機、アメリカのジャーナリストであるカールトン・ビールス (Carlton Beals) のイタリア・ファシズム論が邦訳されているが、後述するコミンテルンのファシズム論も含め、イタリア・ファシズムに関する外国語文献の導入については今後の課題としたい。

5. 丸山眞男「日本ファシズムの思想と運動」(同『現代政治の思想と行動』上巻、第六刷、一九五七年四月、未来社)、丸山眞男「ファシズムの諸問題」(同『現代政治の思想と行動』下巻、第四刷、一九五七年四月、未来社)を参照。

6. 山口定『ファシズム』(二〇〇六年三月、岩波書店)、山口定『ファシズム』論余滴(五)・終 擬似革命論の生成と射程」、『書斎の窓』一九八〇年七月一日、有斐閣)、西川正雄・山口定・吉見義明「現段階におけるファシズム研究の課題」(『ファシズム』歴史評論一九八〇年十一月一日、校倉書房)を参照。なお、戦後日本のファシズム論を鳥瞰したものに、加藤陽子「ファシズム論」(『日本史の論点・争点』『日本歴史』二〇〇六年九月一日、吉川弘文館)がある。

7. 伊藤隆『昭和初期政治史研究』(一九六九年五月、東京大学出版会)七〇一頁、同「昭和政治史研究への一視角」(一九三〇年代の日本)『思想』一九七六年六月五日、岩波書店)、同「昭和史研究の諸問題」、『立正史学』一九八一年九月三〇日、立正大学史学会)、同「ファシズム」論争その後」(近代日本研究会編『年報・近代日本研究 一〇』(近代日本研究の検討と課題)、一九八八年一月三〇日、山川出版社)を参照。なお、伊藤の「革新」派論について酒井哲哉「一九三〇年代の日本政治——方法的考察」(前掲『年報・近代日本研究 一〇』)がすぐれた考察を展開している。

8. 雨宮昭一『戦時戦後体制論』九一―一三頁、第三刷、二〇〇一年七月、岩波書店。

9. 「伊太利の最近政情」、『外交時報』一九三二年一月一日、外交時報社、「伊太利政局紛糾」、『外交時報』一九三二年三月一日、外交時報社)などの「時報」を参照。

10. 山川均は一八八〇年十二月二〇日、岡山県生まれ。一八九五年高等小学校卒業後、京都の同志社補習科に入学、翌々年退学、上京して明治義会中学校に編入、のち東京政治学校に学ぶ。一九〇〇年守田文治と雑誌『青年の福音』を創刊、同誌掲載の「人生の大惨劇」が不敬罪に問われ、巣鴨監獄に入獄。一九〇四年出獄後は、倉敷に帰り、義兄の薬店を手伝う。一九〇六年日本社会党に入党、上京して堺利彦に会う。一九〇七年『平民新聞』編輯に従事。社会党第二回大会

では直接行動論(幸徳秋水)を支持。一九〇八年から一九一〇年まで幸徳らの金曜会主催講演会、赤旗事件などで下獄、のち倉敷に帰り薬店、鹿兒島で農場経営に従事する。一九一三年妻大須賀里子と死別。一九一六年一月上京して堺らの雑誌『新社会』編輯に参加し、吉野作造の『民本主義』を批判。この頃、山川菊栄と結婚。一九一八年荒畑寒村と創刊した雑誌『青服』の記事で下獄、翌年二月の出獄後に堺らと雑誌『社会主義研究』を創刊。一九二〇年日本社会主義同盟、一九二二年日本共産党設立にそれぞれ参加、自らが中心となって創刊した雑誌『前衛』に「無産階級運動の方向転換」を掲載した。一九二三年第一次共産党事件で起訴されるが、のち無罪。この間、兵庫県垂水村などに住み、福本和夫の批判を受けながら無産政党論を発表。一九二七年にはコミンテルンが山川、福本の理論を日和見主義と批判、両者を含む幹部をモスクワに招集するも山川は欠席。一九二七年二月堺、猪俣津南雄らと雑誌『労農』を創刊。一九三六年神奈川県鎌倉郡で「湘南うずら園」の経営に従事。翌年人民戦線事件で検挙、治安維持法違反容疑で起訴されるが、上告審中敗戦を迎えた。一九四五年九月疎開先の広島県から上京し、「民主人民戦線」を提唱し、民主人民連盟委員長に就任。一九四七年日本社会党に入党、向坂逸郎らと雑誌『前進』を創刊。一九五一年、向坂、高橋正雄、岡崎三郎らと「社会主義協会」結成し、機関誌『社会主義』を創刊。一九五八年三月二三日、膀胱癌で死去。山川については、川口武彦『日本マルクス主義の源流——堺利彦と山川均』(一九八三年四月、ありえす書房)、小山弘健、岸本英太郎編『日本の非共産党マルクス主義者 山川均の生涯と思想』(一九六二年六月、三一書房)などを参照。

ニ大日本国粹会は一九一九年一月、関西の土木請負業者西村伊三郎の提唱で、関東の梅津勘兵衛、倉持直吉、河合徳三郎(のちに脱退して大和民労会を結成)らよって結成された団体で、労働争議などで「調停」及び「調停解決の衝」にあたったとされる。一九二二年一月内紛によって、大日本国粹会本部と大日本国粹会関東本部に分裂した(馬場義續『司法研究 第十九輯 報告書集十』七〇四―八頁、一九三五年三月、司法省調査課)。

ニ山川均「外国の国粹会」一一三頁『改造』一九二二年一月一日、改造社。目次では「列国の国粹会」。本稿の引用では、原文のルビ等は省略したほか、引用者による註、省略、改行はそれぞれ□、「…」、「／」で表記した。また旧字体は人名を除き新字体に直し、歴史的仮名遣いはそのまま表記した。

ニ新居格は、一八八八年三月九日、徳島県板野郡大津町大幸村に生れる。徳島中学校、第七高等学校を経て、一九一五年東京帝国大学法学部政治科を卒業。読売新聞、大阪毎日新聞、東洋経済新報、東京朝日新聞で記者生活を送ったのち、文筆活動へ入り、数多くの雑誌に寄稿。政治思想はアナキズムに近かったが、モダニズム文学擁護に組した。一九二一年には西村伊作の文化学院常勤講師を務めたほか、生活協同組合運動にも従事した。戦後は、一九四七年杉並区長に立

候補、当選するが、翌年辞任。日本ペンクラブ幹事、日本ユネスコ協会理事も務めた。一九五一年十一月一五日没。新居の評伝として和巻耿介『評伝新居格』（一九九一年二月、文治堂書店）があるほか、新居と中国との関係を追った西村正男「新居格と中国——あるアナキストにとつての「国境」——」（『徳島大学国語国文学』二〇〇三年三月三十一日、徳島大学国語国文学会）、波瀾剛「モダンの道標——新居格、ハルピンから上海へ」（『朱夏』二〇〇四年五月二五日、せらび書房）、「生活者」として新居の思想と運動を捉えようとした小松隆二「新居格——街の生活者」（生活研究同人会編著『近代日本の生活研究——庶民生活を刻みとめた人々——』一九八二年一月、光生館）などがある。

14 新居格「〇「表題無し」」六二頁（一九二二年以後の趨勢）『改造』一九二二年一月一日、改造社。

15 同前、六三頁。

16 瀧山四郎「フアスシスチー（伊国の反動運動）」一一八頁（新興及び反動社会運動批判）『改造』一九二二年五月一日、改造社。なお目次の題は「フアスシスチー」。

17 同前、一一八、九頁。

18 同前、一一九頁。

19 同前、一二二頁。

20 『日本及日本人』が一九〇六年に発行された右傾雑誌であるに対し、一九二二年一月、国本社（会長平沼騏一郎）から発行された新進の右傾雑誌が『国本』である。国本社については、榎本勝己「国本社試論」（日本現代史研究会編『一九二〇年代の日本の政治』一九八四年五月、大月書店）を参照。

21 太田耕造「南欧に蹶つムソリニ」三二頁（中欧及近東）『国本』一九二二年二月一日、国本社。なお、目次の題では「南欧に蹶つムソリニ」。

22 同前、三〇、一頁。

23 同前、三三頁。

24 同前、三三頁。

25 同前、三四頁。

26 満川龜太郎「欧亜の形勢を顧望して」三五頁（中欧及近東）『国本』一九二二年二月一日、国本社。

27 同前、三六頁。

28 同前、三七頁。

※ 同前、三七頁。

※ 同前、三七頁。

※ 同前、三八頁。

※ 老壮会は、英米勢力の東洋への増大と生活難への「根本的解決」を目指し、満川龜太郎を世話人として一九一八年一月に結成された研究団体。民本主義者、社会主義者、国家社会主義者、軍人、大陸浪人、アナキスト、女性解放運動家、労働者まで「一切の年齢職業懷旧を縦断する所謂『縦の交際』（満川生「老壮会の記」『大日本』一九一九年四月一日、大日本社）が目指された点に特徴があった。ただ、その交際の広さから次第にエタインの知れないものになったため、満川、大川周明らが「実行的思想団体」（満川龜太郎「新愛國運動の諸士」『解放』一九二三年五月一日、解放社）である「猶存社」を結成し、のち大川から訪問を受け上海から帰国した北一輝もこの会に参加した。

※ 荒畑寒村「前進するファシズム」運動史研究会編『運動史研究 九 特集荒畑寒村』一九八二年二月、三二書房。

※ 加藤哲郎「第一次共産党のモスクワ報告書（上）」四四頁『大原社会問題研究所雑誌』一九九九年八月一日、法政大学出版局。

※ 前掲「前進するファシズム」九八頁。同稿では、このほか日本の「ファシズム」として以下の例が挙げられている。「さらに、日本には有力な国家主義グループがあり、ブルジョア進歩分子もその仲間になっている。この団体は、アジア諸民族を結集し、ヨーロッパ人種の桎梏から「解放」することを自己の任務としている。この運動には、各種の国家主義的・軍国主義的な分子が参加している。国家官吏、植民地の職員、その他かつて清朝の打倒を助けた連中、いわゆる「国家社会主義者」もそれに入っている。／最近、これらすべての分子のあいだに、ファシスト団体の国粋会に合同しようとする傾向が目につきだした。イタリアにおけるファシスト反革命とクーデターのとをうけて、この志向がとくにはつきりしてきた」（前掲「前進するファシズム」九八頁）。これは固有名が挙げられていないが、老壮会を「ファシズム」として解釈・報告したものであろう。

※ 新居格「ファシスチー——近状、本体、並にその将来——」二一五頁『改造』一九二二年一月一日、改造社。目次の題では「ファシスチー」。同稿には「カアレトン・ビールス」の名が登場し、執筆にあたり彼の著作を参照していたことがわかる。同時期の新居のイタリア・ファシズム論としてこれ以外に「反動運動としてのファシスチー」（麻生久編『新社会的秩序へ』一九二二年六月、同人社書店）がある。同著は、棚橋小虎の欧州行（一九二二年七月）を記念して発行されたものだが、新居はこの論稿で、「伊太利のファシスチー運動」を「伊国に於ける愛国的反動運動であつ

てその最も著しい色彩は社会主義に対する深刻なる憎悪にある」(四六七頁)とするが、「伊国のフアスシスチー運動が我々に教へることは先づ少数者の勇敢なる慕進はそれが右傾であれ左傾であれ、強い効果を兎に角、惹起するものであることである。そして結局、ある傾向を徹到底せしめるならば「行為の宣伝」になること、暴力の倫理が考量のうちに取容れるやうになること、而して目下の伊国社会党が弱々しきことの悪徳を悟り得て勇敢に戦ふためにはフアスシスチーの狂暴は此点から見れば伊国の共産党並に社会党に取つて歓迎されていゝ事であらうと思ふ」(四八七、八頁)という叙述もあつて興味深い。

㉔ 同前、二二五、六頁。

㉕ 同前、二二八頁。

㉖ 同前、二二八頁。

㉗ 同前、二二九頁。

㉘ 同前、二二〇頁。

㉙ 同前、二二〇頁。

㊀ 同前、二二〇、一頁。

㊁ 同前、二二二頁。

㊂ 同前、二二二頁。

㊃ 同前、二二二頁。

㊄ 経綸学盟については、田中真人『高畠素之 日本国家社会主義』(一九七八年一月、現代評論社)一九九、二〇四頁を参照。

㊅ 高畠素之は一八八六年一月四日、群馬県前橋市に生れる。前橋中学入学後、一九〇二年前橋教会で堀貞一牧師より受洗、一九〇四年同志社神学校本科に入学するが、一九〇七年五月退学し、東京の堺利彦を訪ねる。のち前橋に帰り、一九〇八年一月遠藤友四郎らとともに上毛平民倶楽部設立、五月一日に雑誌『東北評論』を創刊(発禁)するも、九月七日新聞紙条例違反で禁錮二ヶ月の有罪判決、獄中で英文『資本論』を読む。一九〇九年京都に赴く。のち上京し、一九一四年堺利彦とともに雑誌『へちまの花』を創刊。一九一七年二月雑誌『新社会』にカウツキー「資本論解説」を訳載開始。一〇月、横浜滞在中のロシア革命党员コスロフ夫妻を訪問。一九一八年五月『新社会』編輯名義人となる。一九一九年一月老壮会第六回で講演。三月売文社解散につき堺と山川均と談合し、四月一日雑誌『国家社会主義』を創刊。

同月訪問した堺から大鑑閣版『マルクス全集』の『資本論』翻訳担当を依頼される（一九二〇年六月刊行開始）。一九二〇年三月遠藤と雑誌『霹靂』を創刊。八月五日日本社会主義同盟設立趣意書発表され、發起人の一人となる（一〇月辞退し北原龍雄が代役）。一九二二年五月週刊『大衆運動』を創刊。一九二二年一〇月雑誌『局外』（第一次）を創刊。一九二三年一月経綸学盟發起人会を開催、五月雑誌『局外』（第二次）を創刊。一九二四年三月『週刊日本』を創刊、七月雑誌『急進』を創刊。一九二五年一月建国会明治神宮参籠祈願行に参加、一〇月新潮社版『資本論』を刊行開始、一月雑誌『局外』（第三次）を創刊。一九二六年二月一日に第一回建国祭開催され、顧問となる。一九二七年一〇月、改造社版『資本論』を刊行。一九二八年四月、大川周明、安岡正篤と宇垣一成を訪問。九月麻生久から訪問を受ける、翌月麻生久、平野力三ら高島を新国家社会主義政党政党首へ擁立計画。一二月二三日胃ガンで永眠。高島については、前掲『高島素之 日本国家社会主義』を参照。

♫ 上杉慎吉は一八七八年八月一日、福井県に生れる。第四高等学校補充科予科、本科を経て、一九〇三年七月東京帝國大学法科大学政治学科を卒業。翌年、助教授に任官、一九〇六年五月から休職してヨーロッパに留学、G・イエリネックらに接する。帰国後、助教授に再任、一九一〇年に法学博士を取得し、一九一二年穂積八束退官に伴い、教授に昇格。この頃、美濃部達吉と天皇機関説論争。のち興国同志会、七生社など学内右傾団体の結成に関与したほか、一九二三年一月に高島素之らと経綸学盟を結成、一九二六年頃から赤尾敏らの建国会にも関係した。一九二九年四月七日死去。

上杉については、七生社編『上杉先生を憶ふ』（一九三〇年四月、七生社）、宮本盛太郎「上杉慎吉とドイツ」（同『知識人と西欧』第二版、一九八三年四月、蒼林社出版）、吉田博司「国体の政治思想——上杉慎吉」（宮本盛太郎編『近代日本政治思想の座標——思想家・政治家たちの対外観』一九八七年一月、有斐閣）、井田輝敏「上杉慎吉 天皇制国家の弁証」（一九八九年七月、三嶺書房）などを参照。

♫ 中山啓「上杉氏と高島氏が提携するまで」一〇〇頁（新興愛国団体批判）『改造』一九二三年三月一日、改造社。

♫ 高島「放言」一頁『局外』一九二二年一月一日、大衆社。

♫ 同前、一頁。もともと、後年の高島の本格的なイタリア・ファシズム論までだいぶ間隔が空いているので、この頃の高島が中山の誇張ほどイタリア・ファシズムに心を躍らせていたかは疑問であろう。

♫ 赤松克麿「反動団体のいろく」一一七、八頁（新興愛国団体批判）『改造』一九二三年三月一日、改造社。

♫ 上杉慎吉「唯だ国体の精華を發揚するのみ」一二五頁（新興愛国団体批判）『改造』一九二三年三月一日、改造社。  
♫ 同前、一二五頁。

56 同前、一二六、七頁。

57 同前、一二五頁。

58 同前、一二八頁。

59 同前、一二九頁。

60 同前、一三〇頁。

61 同前、一三一頁。この『国体精華乃發揚 真正日本乃建設拳国一致乃提唱』（一九一九年二月、洛陽堂）に注目する宮本盛太郎は、「一つのファシズムの論理構造をもつこの書は、ドイツの動向から巨大な影響を受けた彼が、ファシズム・イデオロギーの形成という点ではナチスの二五ヶ条に先んじ、後年のドイツの運命（と日本の運命）を先取りしたことを示している」（前掲「上杉慎吉とドイツ」九〇頁）と指摘する。

62 山之内靖は、総力戦体制下では「人的資源の全面的動員に際して不可避な社会革命を担った」と述べ、戦時下における社会政策的対応として「階級対立を制度化された労資間交渉の場へと推移させること」、「エスニックな差別を市民的権利の平等という原理によって希釈化すること」、「戦時補償」などがあつたとする（同『システム社会の現代的位相』三七、六六頁、一九九六年六月、岩波書店）。なお、山之内への批判として、本稿では崎山政毅の以下の主張「少なくとも、総力戦体制の論が提起する「連続」を考え、実践と批判を新たにづくりあげていこうとすると、ネガティブな在り方を何度となくくり返し、後退につぐ後退を経たただ中から、「システム社会論」が依拠しようとする「新しい社会運動」の以前に、否定されたかたちにおいてであれ存在した「可能性」に到達しようとする、このことが求められてはいないだろうか」（同「総力戦体制」研究をめぐるいくつかの疑義——システム社会論の視座からの総力戦体制分析に関して）一九七頁『戦後論存疑 レヴィジョン』（再審）第一輯』一九九八年六月一五日、社会評論社）に触発されるどころが多かった。

63 前掲「唯だ国体の精華を發揚するのみ」一三一頁。

64 経綸学盟はその後、ソヴィエト政権の非公式使節ヨッフェ来日につき中止勧告などを行なうが目立った活動はなく、消滅へと向う。雑誌『日本主義』（国会図書館憲政資料室所蔵『斎藤実関係文書』書類の部一、一一八、二五）一九二三年八月一五日号には、上杉慎吉の巻頭言「天下無敵」の他に、高島素之一党の茂木久平や高島亡き後の国家社会主義運動を牽引する津久井龍雄の論説が掲載されている。また「前号目次」には、和木寅次「経綸学盟」が列挙され、経綸学盟との関係を想起させる。『日本主義』の発行所は「東京府豊多摩郡渋谷町下渋谷一七八二／壬戌会」、編輯兼発行兼印



刷人は「東京府豊多摩郡渋谷町下渋谷一七八二／加藤房蔵」となっているが、詳細は不明。

81 村田陽一編訳『コミンテルン資料集 第二巻 一九二二—一九二四』（一九七九年一〇月、大月書店）には、「イタリ  
アの労働者と農民へ」（一九二二年一月五日採択）、「戦術についてのテーゼ」（同年一二月五日採択）などの公式文書  
が収録されているほか、ジノーヴィエフ、カール・ラデック、ボルディエーガの諸報告に関する動向も記されている（五  
八二、六二四、六二五頁）。

82 西雅雄「共産党インタナショナル第四回大会（二）」一六九頁『前衛』一九二三年三月一日、前衛社。『前衛』は、法  
政大学大原社会問題研究所編『社会主義評論雑誌 前衛（二）』（一九七二年八月、法政大学出版局）で覆刻されたもの  
を用いた。

83 富永幸生・鹿毛達雄・下村由一・西川正雄『ファシズムとコミンテルン』一三、四頁、一九七八年六月、東京大学出  
版会。

84 西雅雄「共産党インタナショナル第四回大会（三）」七三頁『赤旗』一九二三年四月一日、赤旗社。『赤旗』は、法政  
大学大原社会問題研究所編『日本共産党合法機関誌 赤旗・階級戦（全）』（一九七三年二月、法政大学出版局）で覆刻  
されたものを用いた。

85 前掲「共産党インタナショナル第四回大会（三）」七四頁。

86 同前、七四、五頁。なおイタリヤ・ファシズムについて片山潜からボルティエガへの質問と回答が在モスクワ片山潜  
「ファシズムと欧州の現状」（『改造』一九二三年九月一日、改造社）に掲載されているほか、同稿には、「第三国際共  
産党の会長チノヴィツ氏の「第四回大会中になした演説の一節」も掲載されている。

87 片山潜については、岸本英太郎・渡辺春男・小山弘健「片山潜（第一部・第二部）」（一九五九年一二月・一九六〇年  
六月、未来社）、山内昭人「リュートヘルスとインタナショナル史研究 片山潜・ボリシエヴィキ・アメリカレフトウイン  
グ」（一九九六年四月、ミネルヴァ書房）を参照。

88 萩野正博「弔詩なき終焉——インタナショナルリスト田口運蔵」一九八三年九月、御茶の水書房。

89 田口運蔵「ファシズムの由来と本質」二六、七頁『前衛』一九二三年一月一日、前衛社。

90 同前、一三三頁。

91 同前、一五、六頁。

92 同前、一六頁。

1 同前、二七頁。

2 山川均「無産階級運動の方向転換」『前衛』一九二二年八月一日、前衛社。『前衛』掲載論文では伏字になった一文として「われわれは思想的に革命主義者となった。けれどもこの革命主義者は、まだ大衆を動かすことを知らぬ革命主義者であつた。」<sup>87</sup>、大衆と共に動くことを知らぬ革命主義者であつた。<sup>88</sup>「革命の思想を知つて、革命の運動を知らぬ革命主義者であつた」(「無産階級運動の方向転換」三四五頁、山川菊栄、山川振作編『山川均全集 四』一九六七年八月、勁草書房)がある。

3 山川均「武装した反動団体」一二三頁〈新興愛国団体批判〉『改造』一九二三年三月一日、改造社。

4 同前、一二二頁。同論文が山川均『井の底から見た日本』(一九二四年二月、更生閣吉田書店)に収録される際には、「皆な一様に愛国主義」が「皆な一様に国粹主義」(山川均「武装した反動団体」二七三頁、前掲『井の底から見た日本』)へと変えられている。

5 「」内の文字は、山川均「武装した反動団体」(前掲『井の底から見た日本』)二七八頁、山川均「武装した愛国団体」(山川菊栄、山川振作編『山川均全集 五』一九六八年七月、勁草書房)一三八頁より補った。

6 山川均「武装した反動団体」一二三、四頁〈新興愛国団体批判〉『改造』一九二三年三月一日、改造社。

7 新居格「反動運動所感」一二〇頁〈新興愛国団体批判〉『改造』一九二三年三月一日、改造社。

8 同前、一二〇頁。

9 同前、一一九頁。

10 同前、一二二頁。

11 同前、一二二頁。